



HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	序
Author(s)	池上, 二良
Relation	池上二良採録・訳注, ウィルタ口頭文芸原文 = Uilta oral literature : a collection of texts. 増訂, 大阪学院大学情報学部, 2002, vi, 149p., (科学研究費補助金(特定領域研究(A))研究成果報告書, 環太平洋の「消滅に瀕した言語」にかんする緊急調査研究), (ELPR publication series, A2-013), (ツングース言語文化論集, 16).
Citation	ツングース言語文化論集, 16, 1-2
Issue Date	2010-03-31
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/56958
Type	report
File Information	02forewor.pdf



序

サハリン(カラフト)のウイльта(旧称オロツコ)族は文字をもたなかった。そのはなすウイльта(旧称オロツコ)語は文字がないので、すべて口頭によった。したがってウイльта族が言語によってうみだす文芸というものは、すべて口頭におけるものであり、ウイльта人によって書かれることがなかった。

ウイльта族の口頭文芸には、少なくとも南の地方では、つぎのいくつかの種類(ジャンル)がある。¹⁾

1. テールグ(təəlugu) これは、いいつたえ、伝説、むかしばなしである。テールグには、たとえば、ウイльта人とアイヌ人とのたたかいのいいつたえやある人物の逸話、あるいはおおおとこ(kaljami)やばけもの(amba)などの妖怪にであったはなし、きつねにばかされたはなしなどがある。テールグは、ウイльта人によってその内容が実際にあったことと信ぜられ、実話とかがえられているようである。

2. サフリ(saxuri) これはものがたり、おとぎばなしである。これには動物を擬人化したはなしもある。ウイльта人は、サフリをその内容が架空であるつくりばなしとかんがえているようである。サフリの形式的特徴は冒頭に daa xajilaččee のことばをおいてはじまることである。

3. ニグマー(nigmaa) これは語りものである。語りの部分とふしをつけてうたう部分とからなる。前者はウイльта語、後者はキーリン語(エウエンキー語の一方言)である。ニグマーはキーリン人からつたえられたものであろうが、一篇のながさもながく、ウイльта族の口頭文芸では重要なものである。ニグマーのことは本書の3にもあらわれる。

サフリとニグマーが語られる際には、語りてが語るきれめきれめに、これをきくききてがあいのてに gəə という発声をする。テールグにおいてはこれがない。

4. なぞなぞ(gajau) なぞ問答において、なぞをかけるはじめに gan gan gajawoo のことばをおく。

5. ハーガ(xəəgə) これは歌謡であり、即興歌といえよう。その場かぎりできえずに伝承されてきたハーガの採集されたかずはすくない。²⁾ 冒頭および末尾に、また中間において節のおわりに gənnəngəkkə gəənənə の句があらわれる。

しかしこのほかにこどものためのはなしとうたがある。これらが口頭文芸のうちでも上にあげたものとはまた別の種類をなすことはこれらの篇の提供者もみとめており、童話、童謡とよぶことができよう。なお子もり歌もこの童謡の一つとみられよう。

北の地方でも、またこれらのジャンルが立てられよう。しかし、おとなの歌謡には xəəgə と異なる別のジャンルも立てられるだろう。

ウイльта語は、ほぼ北緯 50 度を境として、南サハリンのポロナISK(敷香)を主要点としてふくむ地方のウイльтаが話す南方言と北サハリンのワール村を主要点としてふくむ地方のウイльтаが話す北方言に大別されよう。

本編は、3 部に分けられている。第 1 部は南方言の資料である。第 2 部は、やはり南方言である 5, 6, 7, 8, 14, 15 番を除くと、すべて北方言の資料である。なお、第 3 部の 1, 2, 3 番は、第 1 部の 12, 4, 11 番と同じ語り手が語った同じ話の別の原文である。ただし、4 番の原文は第 1 部の 19 番と同じである。第 3 部はウイльта語テキストの英訳を付してある。

なお、ここに掲載するウイльта語原文のうち、第 1 部の 28 番、第 2 部の 16 番は

はじめて発表するものであるが、他の原文はすでに発表したものの再録である。初出は本文末尾に記す。ウイльта語原文はすべて音声 CD に複製して付録とする。

本研究の資料採集は多年の文部省科学研究費補助金を受けておこなった。本書の刊行に際して、北海道大学教授津曲敏郎氏と小林香与さんの尽力を得たことを深く感謝する。

注

- 1) 山本祐弘『北方自然民族民話集成』(東京 相模書房 1968 年)も参照。
- 2) オロコ語で採集された *xəəgə* の 1 編は川村秀弥『土語と土俗』(稿)(『川村秀弥採録カラフト諸民族の言語と民俗』(池上二良編)(昭和 57 年度ウイльта民俗文化財緊急調査報告書 5)札幌・網走 1983, 41-43 ページ)にのる。

Summary

The Uiltas (=Oroks) inhabit Sakhalin and speak Uilta (=Orok), a Tungus language. They have no script. Accordingly they have no written literature, only an oral one. In the region of the southern dialect of Uilta it comprises the following kinds :

1. *təəlunū* — a tradition or a legend. Among them we find, for instance, a tradition of the conflict between Uiltas and Ainus, anecdotes about famous figures, stories of a giant (*kalʹjami*), stories of devils (*amba*) and the story of enchantment by a fox. The Uiltas seem to believe that the *təəlunū* are true stories.
2. *saxuri* — a story or a fairy tale, e. g., stories of personified animals. It seems that the Uiltas think *saxuri* are fictitious stories. Every *saxuri* begins with the introductory phrase *daa xajilačʹee*.
3. *niymaa* — a recited story. This consists of the successive alternation of two parts, one in Uilta and the other in Kilin, a dialect of Evenki. Only the Kilin part is recited to a tune.

During the telling of *saxuri* or *niymaa* the audience puts in the interjectory word *gəə* at the end of every paragraph.

4. *gajau* — a riddle. This opens with the introductory phrase *gan gan gajawoo*.
5. *xəəgə* — an improvised song. At the beginning of a *xəəgə* and at the end of each stanza of a *xəəgə* the line *gənnəŋgəkkə gəənənə*, or one of its prolonged variants, appears.

In addition, the Uiltas have nursery tales and songs. The cradle song seems to be one of the nursery songs.